

■第35回日本森田療法学会

＜パネルディスカッション＞

五高出身者たちの社会教育と森田療法

— 下村湖人らの「新風土」から水谷啓二の「生活の発見」へ —

岡 本 重 慶*

I. はじめに

森田生活道の伝道者、水谷啓二は、昭和23年より五高出身の社会教育者、下村湖人や永杉喜輔と交流していた。水谷の五高時代の友人、永杉との再会による縁であったが、五高から社会教育の分野で重要な人物が輩出した背景があった。本報告では下村の盟友の田澤義鋪、下村、永杉の3人の五高出身の社会教育者たちの活動に光を当て、それが水谷の森田療法に流れ込んだ小史を述べた。

II. 五高出身の社会教育者たち

1. 田澤義鋪 (1885-1944), 明治38年五高卒,
同42年東大法科卒

田澤は官吏となって静岡県に赴任したが、そこで田舎の青年たちが教育から取り残されている現実を見て、大正3年に静岡市の蓮永寺で日本最初の青年宿泊講習を実施した。さらに日本の青年団運動に貢献して、「青年の父」と呼ばれた。その指導は「平凡道を非凡に進め」であった。彼はさらに壮年団運動を興したが官憲の圧力を受けた。

2. 下村湖人 (1884-1955), 明治39年五高卒,
同42年東大英文科卒

名作『次郎物語』は自伝的成長小説として知られるが、家庭教育、学校教育や青年教育のあり方を世に問うた「社会教育」の書でもあった。森田

療法の視点から特に注目されるのは、第五部における塾風教育である。田澤に招かれて昭和8年より小金井の浴恩館（青年団講習所）の所長を務めた体験がそのまま描かれており、指導者が青年たちと起居を共にする合宿生活は、入院森田療法さながらである。修養体験を日常生活に生かすことを重んじた指導も森田療法に等しい。また田澤の壮年団教育を受けて、世に目立たずに情操を深め合う自由な集団を提唱し、「葉隠」に引用されている、煙のように密やかな忍ぶ恋の歌に因んで「煙仲間」と称した。禅語に基づいて「白鳥芦下に入る」と言い、田澤と同様に「平凡道を非凡に歩め」と教えたが、それらは「煙仲間」に通じる思想であった。下村は昭和9年6月に著書『凡人道』を上梓したが、森田正馬は同年7月15日の形外会で「凡人主義」を説いており、下村の上記の書の影響を受けた可能性が濃い。少なくとも両者には思想の共有があったと言える。

3. 永杉喜輔 (1909-2008), 昭和6年五高卒,
同9年京大哲学科卒

哲学科を出た永杉は、青年団講習所の研究生として浴恩館に入った。哲学用語を乱発していた彼は、そこで下村が黙々と便所掃除をしている姿を見て痛撃を食らう。以後下村に師事し、社会教育に情熱を傾けた。

*京都森田療法研究所
(〒601-8001 京都市南区東九条室町23番カインド-Ⅲ711号)

Ⅲ. 下村湖人の「新風土」から 水谷啓二の「生活の発見」へ

雑誌「新風土」は「煙仲間」の準機関誌であった。戦前の旧「新風土」が姿を消した戦後に、下村を中心に同人が集い、永杉（後に群馬大学教授）の編集で、昭和23年に新たに「新風土」を創刊した。創刊の年に水谷は下村に出会って共鳴し、自身で煙仲間を結成した。また水谷は、神経症の額縁商人の人生を描いた『草土記』を出版したが、下村は、主人公の生き方と作者の描写を「非凡なる平凡」として激賞した。下村の没後、水谷は昭和31年に「啓心会」を立ち上げ、翌年新たな雑誌を創刊した。永杉の発案でその誌名を「生活の発見」として、森田療法と社会教育の二重の趣旨をその雑誌に込めたのであった。

Ⅳ. 討 論

「煙仲間」は永杉を慕う人たちを中心に長く存続した。それは「純な心」を絆とする非凡なる凡人たちの、いわば「メタ集団」であった。

田澤、下村による青年の合宿指導は、非医師が主宰する合宿研修の系譜として戦後につながり、水谷の啓心寮、長谷川洋三による龍穩寺での発見会の合宿、和田重正の一心寮の活動に及んだ。

Ⅴ. おわりに：「平凡の中の非凡」

高良武久教授が墨書したこの言葉に、教育と森田療法が融合した深い人間観を見る。